

堺が生んだ近代日本の文学史を代表する歌人
与謝野晶子の生涯
—歌碑とともに辿る—

岩田 昌子

海こひし潮の遠なりかぞえつつ^{おとめ}少女となりし父母の家



(阪堺電車宿院駅下車)

第二次世界大戦の戦火によって、市街の大部分が壊滅した堺市がやっと文化に目をむけるようになった昭和三十六年五月二十八日、晶子没後二十年の「晶子二十年祭」の行事の一つとして堺市教育委員会により建立されました。昭和六十一年、生家の裏口にあたる現在の位置に移動されました。晶子の自筆です。

出生から少女期

晶子（鳳 志よう）は※一八七八年（明治十一年）、現堺市堺区甲斐町の老舗和菓子屋「駿河屋」の三女として生まれました。

現在の大阪府立泉陽高等学校の前身・堺女学校で学んだのです。

泉陽高校は江戸時代の同心屋敷のあとに存在します。

在学中は「源氏物語」に傾倒し、卒業後、店の切盛りをしながら、鳳 晶子などの名前で短歌に目覚めるのです。 ※前年は西南の役がおこる。

ふるさとの和泉の山をきはやかに浮けし海より潮風ぞふく

(浜寺公園 昭和四十一年七月「与謝野晶子の会」による建立)

生涯の伴侶 与謝野 寛との出会い

一九〇〇年(明治三十三年)八月、来阪した「与謝野 寛」は浜寺の寿命館で、河野鉄南、山川登美子、晶子らとで歌会が開かれました。

これが、晶子と寛の愛のプロローグとです。

その年の十一月、歌人山川登美子と与謝野 寛をめぐり、愛の葛藤があり、美貌という点では、到底登美子には及ばない晶子ですが、彼女の奔放自在な情熱が、「恋の勝利者」とさせたのです。

山川登美子は雪の若狭で、結核により、三十歳の生涯を閉じたのでした。

そして結婚

一九〇一年(明治三十四年)六月、晶子は故郷の堺を出奔して、東京の鉄幹のもとへ走り、『みだれ髪』を出版しました。

この年の十月、二人は結婚しました。

君死にたまふことなかれ



—旅順口包囲軍の中にある弟を嘆きて— (全編別添資料参照)

(堺市堺区 大阪府立泉陽高校校内)

中世の自由都市・堺を守った濠の上に阪神高速線がそびえるその西側の旧市街地に位置する泉陽高校の中庭に石碑が立つ。

昭和四十六年十月二日、同校創立七十周年記念行事のひとつとして建立。

○一九九四年十一月、立命館大学平和ミュージアム

○一九九九年 六月、中国大連市遼寧師範大学に上記詩碑が建立されている。
与謝野晶子を代表する作品

—時代の背景と反響—

明治三十七年九月、『明星』に発表された詩。

晶子は日露戦争中、兵役にあった弟の身を案じて、この詩を発表したのです。

時代を超え、国を超えて人々の心を動かす力をもっている

一人の肉親のなにもものにもかえがたい命を尊ぶ訴えが、国民の訴えとして政治を動かすことをしていたら、その後、多くの命は奪われていなかったのではないのでしょうか。

国民のささやかな願いを無視して、加速度をまして、日本は軍国主義へとすすんでいくのです。

この詩を発表したことにより、国家に対して不忠だと批判をうけたが、晶子は自分の真の心を表現したものと反論しました。

歌人：石上 露子（本名：杉山 タカ）の作品。

富田林の素封家の長女として生まれ、歌はあきらめさせられ、家督をつがざるをえませんでした。

下記作品は「君しにたまふ・・・」の詩の二カ月前に発表されております。

露子は鉄幹と晶子が「明星」の後継誌として、「冬柏（とうはく）」を発行することになり、晶子から勧誘の手紙をうけ、驚くとともに感激して、加入して、短歌の寄稿を始めたのです。

みいくさこよひ誰が死ぬさびしみと髪ふく風の行方みまもる

戦争のために、今日も罪もない命がうしなわれていく。

なんとも理不尽なことであろう。

戦死していく人たちの親を、妻を、子を思い、また国の行く末を思い見るとき、言葉に尽くせない程の深い不安と悲しみ、寂しさにおそわれる。

晶子と露子は、「生命をうみ、生命を育てる」共通した女性の偉大さがあるからこそ、権力に向かって、堂々と心の真実を訴えることができたのです。

「

家庭に於ける晶子

結婚生活で待っていたのは、豪華で華麗な歌の世界とは正反対の厳しい現実でした。

食べるのにも事欠くらしの中、晶子は次々と身ごもり、十二人を出産。

合間に精力的に創作活動を繰り広げました。資料にある「日曜の朝飯」の詩から、晶子の母親像・家庭教育が伺うことができます。

どこにもみかける家庭、どこにもいる母親の姿が目に浮かんできます。



山の動く日

(堺女子短期大学内)

昭和六十二年建立 「晶子を歌う会」が建立し、同大学に寄贈した。石碑の左側にノルウエー語訳と、裏面に一九八六年（昭和六十一年）五月に成立したノルウエー内閣の女性八名の名が刻まれている。

一九一一年（明治四十四年）九月 「そぞろごと」の題で発表。

初出「青 踏」の創刊号にのせた詩

女性の解放と自立を求める詩であると、ノルウエーをはじめ海外から、高く評価されています。

（当日は、現地を巡りませんが、晶子を代表する詩として有名ですので、紹介しておきます。

創作活動の内容

晶子は生涯に歌集二十六冊(詩歌集や共著を含む)、評論感想十五冊 などをだしているが、その記念すべき第一歌集が『みだれ髪』で、三百九十九首収められています。

晶子研究者の間では、『みだれ髪』『君死にたまふこと勿れ』『新新訳源物語』をベストスリーとよばれています。

その膨大な歌や評論、古典注釈は、現代社会に何かを示唆してくれます。

鉄幹・晶子夫妻の渡欧

○鉄幹渡欧 一九一一年（明治四十四年）十一月

危機感を覚えた晶子は金策に奔走。鉄幹をパリへ送りだしました。

洋行は鉄幹の気力と晶子への情熱を呼びさましたのです。

○晶子渡欧 一九一二年（明治四十五年）五月

晶子は七人の子供をおいて、パリへむかい、愛を再燃させました。

パリで目にした自信にみちた西欧女性たちのすがたが、晶子を評論活動へと向かわせました。

—女三人のシベリア鉄道—

森 まゆみ著

明治の末から昭和のはじめにかけて、それぞれの理由でシベリア鉄道にのった三人の女性の人生の旅を追った書です。

鉄道の旅は、飛行機やドライブと違いしばしば人生にたとえられるものです。パリにいる夫にあうために、七人の子供を日本においてシベリア鉄道乗った晶子。

離婚後、友とも恋人とも言える女性とともにロシアに旅立った宮本百合子。そして、夫を東京に残して、パリに住む別の男性に会いにいった林 芙美子それぞれの人生は、何とエネルギーにみちあふれていることか。

晶子達の時代に、女がシベリア鉄道で旅をするということは、今と比べものにならない程勇気のいる行為でした。

昔の女性と比べると、自分達は進んでいると思いがちです。

しかし、この時代に先端を生きる女性達の人生を見ると、私達よりずっと体力にも知性にも満ちあふれていることに気づいたのです。

（書籍の紹介：酒井 順子・エッセイスト）

水軍の大尉となりてわが四郎 み軍（いくき）に往く 猛く戦え

（昭和十七年一月 婦人公論に掲載）

東大をでて、海軍にとられた四男のことを詠んだ一首です。

当時は「征く」と表記したが、晶子がこの歌で「往く」としていることにも注目したいです。

今日からみて、この歌をふくめ、晶子が戦争遂行の時流にのったかのように見えることは否めない事実です。

息子の出征をこのように歌わなければならない晶子のつらさも思いやられ

る。 時代は晶子をそこまで追い詰めていたのです。

晶子の病状と逝去

他二篇の歌も含めて、自註を加えるいとまもなく、病状（脳梗塞）は深刻の度をまし、昭和十七年五月二十九日永遠の眠りにつきました。

青山斎場で行われた告別式で、自作の長編の詩に送られて、晶子は鉄幹の眠る多磨墓地へ赴いたのです。

（参考文献：入江 春行著 与謝野晶子とその時代）

その後の日本の動き

昭和二十年八月十五日

戦局は急速に悪化。 日本は近代兵器の前に大敗。

鈴木内閣 ポツダム宣言を受諾、降伏。

東久邇内閣 : 降伏文書に調印 連合軍の本土進駐

幣原内閣 : ○日本の民主化政策改革指令

- ・財閥解体指令
- ・農地改革指令
- ・労働組合法制定
- ・教育の自由化
- ・新選挙法公布（婦人参政権）

昭和二十一年十一月三日

吉田内閣 : 日本国憲法公布

昭和二十二年五月三日

片山内閣 : 日本国憲法施行

エピローグ

ペリー来航後、日本は幾多の国民の命を犠牲にし、植民地を獲得しましたが、第二次大戦後のポツダム宣言により、日本の領土は縮小されました。

二〇〇七年（平成十九年）に逝去された作家 城山 三郎氏は「戦争で、唯一日本が得られたものは、憲法九条だ」と繰り返し語っておられたそうです。

平塚らいちょう、晶子をはじめ多くの、女性活動家がおりますが、ここに大正時代の日米デモクラシーの友情と女性解放に生涯をささげた林 歌子を紹介しておきます。

林 歌子は昭和二十一年 病床にあり、同志から「占領軍は公娼廃止と女性参政権の覚書を交わしましたよ。」と告げられ、涙を流し息をひきとられました。 享年 八十二歳。

「近代の日本」については、学校時代に時間がなくなったという理由で学んでいないことが多いと思います。

現代の日本を知るうえで、大切だと思います。